

守破創 対談

米国で育った頃から女性キャスターに憧れ、テレビ局のアナウンサーとなって数々の人気番組を担当した木佐彩子氏。結婚・出産を経て、報道の仕事に手応えを感じはじめた頃、退職して米国で再び暮らすという道を選んだ。後悔しない生き方を選択し、選んだ道をベストの道にしていくなめには何が大事なのか。親交ある中川順子審議委員と語り合った。



日本銀行政策委員会 審議委員

中川順子

NAKAGAWA Junko

1965年生まれ。88年神戸大学文学部卒業後、野村證券(株)入社。2001年同社財務部フィナンシャル・プランニング課長、04年同社退社。08年野村ヘルスケア・サポート&アドバイザー(株)代表取締役社長、10年野村ホールディングス(株)マネージング・ディレクター(Co-Deputy CFO)、11年同社執行役 財務統括責任者(CFO)、13年同社執行役員 グループ・インターナル・オーディット担当、17年野村アセットマネジメント(株)執行役専務兼チーフ・リスク・オフィサー(CRO)、19年同社CEO兼代表取締役社長および野村ホールディングス(株)執行役 アセット・マネジメント部門長、21年野村アセットマネジメント(株)取締役会長。同年6月より日本銀行政策委員会審議委員。

自分の役割に全力を尽くして 選んだ道をベストの道にする



フリーアナウンサー

木佐彩子

KISA Ayako

1971年生まれ。父親の転勤に伴い小学2年生から7年間を米国ロサンゼルスで過ごす。青山学院大学文学部卒業後の94年、フジテレビにアナウンサーとして入社。「プロ野球ニュース」「笑っていいとも!」「めざましテレビ」「FNNスーパーニュース」などの人気番組を担当した。2000年3月に東京ヤクルトスワローズ所属の石井一久投手と結婚。01年12月に男児を出産。02年に石井投手がロサンゼルス・ドジャースに移籍したこともあり、フジテレビを03年1月に退社。06年、石井投手の日本球界復帰に伴って帰国し、フリーアナウンサーとして本格的に仕事を再開。BSジャパン「教えて!ドクター 家族の健康」をはじめ、テレビ番組やCMを中心に活躍中。シンポジウムなどのモデレーターを務める機会も多い。

入社一年目に経験した
阪神・淡路大震災の取材

中川 本日はありがとうございます。木佐さんとのいつもは楽しいおしゃべりですが、今日は少々よそ行きの感じで始めたいと思います。アナウンサーとしてフジテレビ時代から有名で、長くご活躍されていますが、きっかけは何だったのでしよう。

木佐 私は父の海外勤務で、小学二年生から中学二年生までロサンゼルスで暮らしていました。その頃、夕方のニュースのメインキャスターがコニー・チャンという中国系米国人の女性だったんです。日本でいえば安藤優子さんみたいな存在で、格好いいなど。私も米国でアジア人として暮らしていたので、凄く誇りに感じていました。

青山学院大学の学生として就活を始めた頃、父みたいに海外で働けたらいいなという気持ちがありました。大好きな米国と日本の架け橋になりたいとい

う思いから、在日米国大使館に就職したかったのですが、その年は採用予定がありませんでした。そこで、自分らしく輝けるお仕事は何だろうと改めて考えたときに、ふと、あのコニー・チャンの輝きが舞い降りてきて、それはアナウンサーかなと思っただけです。

中川 入社直後から生放送の番組が多かったですよね。

木佐 私が入社した一九九四年ごろのフジテレビは「脱ワイドショー」を掲げ、芸能人のスキヤンダル取材をやめて情報番組に切り替えようとしており、同時にベテランのレポーターさんもいなくなりました。そんな時期に、阪神・淡路大震災が起きました。もうベテランさんがいないので、新人の私がいまの現場取材を任されたんです。「しばらく帰れないから覚悟して来い」と、震災当日の朝に電話で言われて。今思うと、あり得ないんですけど、ブランド物のポストンバッグを二つ持って行ったら「馬鹿野郎、旅行じゃないんだ！」と、今度は叱られて……。

荷物を一つにまとめて被災地へ向かい、何日間かずつと取材したんです。

中川 宿泊場所は？

木佐 ロケ車とかに泊まりました。私は震源地の淡路島の取材から入ったんです。

中川 つらい場面の取材も多かったのではないですか。

木佐 家が崩壊し、家族の安否も分からないような被災者に「インタビューしてこい」とディレクターに言われ、「今はしないほうがいいと思います」と返したら、「奇麗事を言っている場合じゃない」と。そう言うあなたはコンビニでおにぎりを買い占めていたくせに、と言いたいところを我慢したり、冷静になれと自分に言い聞かせたりするうちに、目の前の現状を、インタビューを通じて知らせなければと思いましたが。被災した方々に、葛藤しつつマイクを向けたら話をしてくださったんです。

中川 凄いな経験からスタートされましたね。その頃でしようか、連日朝から晩までテレビでお顔

をみていた記憶です。

木佐 働き方改革の「は」の字もない時代でしたから。週の前半は「プロ野球ニュース」、半日だけ休んで週の後半は「めざましテレビ」、土曜日は早朝番組を担当し、合間には特番もありました。でもアナウンサーの仕事はそんなものだと思います。あまり深く考えていなかった。とにかく、目の前の一本に最大集中。自分の出せるものを出そうと。それで失敗したらプロデューサーが悪いんだというくらい開き直って臨んでいました。ただし、本番で恥をかいてしまったことは二度とやらない。同じミスを繰り返してはダメだと、そこだけは自分に課していました。

手応えを感じ始めた 仕事を辞めて米国へ その選択をベストにする

中川 二〇〇〇年にプロ野球選手石井一久さんと結婚されてからも、アナウンサーの仕事を続けられましたね。

木佐 古田敦也さんと結婚して

フジテレビを退社していた中井美穂さんから「木佐、残る選択肢があったんだね」と。当時、プロ野球選手と結婚したらサポートするために辞めなければ、みたいな空気があったんですね。でも、私は結婚後、安藤優子さんと一緒に夕方の「スーパーニュース」を担当することになりました。プロ野球選手って遠征が多いし、東京にいるときもナイターが終わってから帰ってくるって十一時すぎになるんです。だから私は夕方の番組を終えてスーパーに寄り、家に帰って晩ごはんを作っていました。

元々コニー・チャンに憧れてアナウンサーになりましたし、報道番組の担当はやりがいがありました。(二〇〇一年二月に起きた)えひめ丸事故では現場のパールハーバーへ取材に行つて、他局との報道競争を経験しました。スクープを取れたりして、この仕事に対する覚悟や意義を感じたり、考えていた時期です。だけど、二年ほど報道に携わった後、産休に入ったりして状況が変わりました。夫もポステイ

ングでメジャーリーグへの移籍が決まったり。

中川 フジテレビを二〇〇三年に退社して米国に移住されました。選択に迷いはありませんでしたか。

木佐 私としては、仕事に手応えを感じはじめた頃でした。まだ全然上手じゃなかったけど、多少やりたいとも言えるくらいになっていました。でも、夫と一緒に行かないという選択肢はなかったです。メジャーにポスティングで移籍する場合、選手は自らチームを選ぶことはできません。入札で選手との交渉権を獲得したチームに行くことになるのですが、結局、ロスに本拠地を置くドジャースに決まったんです。私のホームタウンと想っていたロスだったので縁を感じました。なので、会社を辞めることになったらなっただ、「あーあ」とはあまり思わなかったんです。今は、私のキャリア・シフトチェンジの時なんだなと。

中川 積み重ねてきたキャリアを止めるのも、与えられたルート

だった、と。ご主人がメジャーに移籍することだって、計画的に進めるのは無理ですね。米国での生活は楽しめましたか。

木佐 はい。夫は、家族の心配をしなくていいから「助かったかもね」とは言っていました。夫自身のやりたいことでロスに連れてきたうえに、遠征で家をあける日が多いにもかかわらず、私が楽しんでいたので。

中川 その秘訣は？

木佐 転勤族みたいな仲間はいなかったですが、ベビーシッター兼「夫の英語の先生」みたいな感じで、ちょっとお友達的な人がよく来てくれて、私は息子を預けて出かけたりにしていましたね。メジャーの選手の奥さんとのデイナーとか、自分の生活も楽しんでいました。順子さんも、一回会社を辞めてご主人と海外に行かれましたね。

中川 ええ。ちょっと状況は違うかもしれませんが。

木佐 そのとき選択肢はいっぱい出てきますよね。私は、ちょっと決めたら、後で振り返ったときに「やっぱりこっちがベス

トだった」と思いたい。二回失敗しない努力と、選んだ道がよかったというふうにする努力はしたいなと、いつも思っているんです。

中川 私は木佐さんの言葉で「夫や子どもにとって、シェアコンジみたいな存在になりたい」が印象的です。家庭でいい風を吹かせる、という感じでしょうか。

木佐 はい。アナウンサーの仕事でも同じことを思っていました。たとえば報道番組でスタジオの空気がちょっと凍りついたと感じたら私がやわらかくしたり、バラエティーで内輪受けになり過ぎていたら視聴者を意識した方向に変えたり、そういう「温度管理」もアナウンサーの仕事の一つだと思います。

家庭も一緒で、夫が試合で勝っても負けても、家の中はいつも同じ温度の空気が流れているようにしよう。結婚するとき夫に言われたんです、勝っても負けても一喜一憂してほしくないって。「勝ったら僕が凄いだから、負けてもアヤのせいじゃないから」と言うんです。それは

そうだなと思いましたが、私は家庭で心地よい風を流すシェアコンジみたいな存在でいたいなと思っただけです。

最後のキャリアは米国で日本との架け橋になりたい

中川 インターネットの普及につれてメディアの環境は大きく変化しましたね。

木佐 テレビは大変そうですね。番組を作る人も、番組に出る人も、私は、番組で本音をしゃべる人が好きです。それは画面に表れますし、自分で本当に思っていることを言う人がテレビで生き残るのかなと思うんですね。一方で、アナウンサーの中には、番組の後のSNSの書き込みを気にし過ぎて、それで凄くちゃんとしよう人もいます。もうちょっと自由にやればいいのかと思うのですが、当事者だと思えないのかな。

中川 今後、メディア出演のほかに、どのような仕事をしたかとお考えですか。

木佐 もう一回米国で暮らして、今度は働きたいんです。ロスで



幼少期を過ごし、結婚後は子育てもしましたが、働いたことはありません。私ができることなんて、日本と米国の架け橋になるような仕事くらいかもしれないが、最後に米国の現場で仕事をしたいという気持ちがあります。

中学生のとき、米国の友達に「親の転勤で帰国しなければいけない」と言ったら、「日本に帰るなんて、かわいそう」という感じだったんです。当時、米国で習う日本といえば、人々は着物で暮らしているとか、まだそういうイメージでした。「日本ではジーンズをはいていいの？ カラーテレビはあるの」とまで言われて、「ちよつと待って」と。「米国の家庭のテレビの多くはソニー製でしょ、あれは日本の会社だよ」とか、「日本車もいっぱい走っているじゃないの」というようなプレッスンをしたわけです。その頃に今の状況は似ているところがあるような気がするんです。

日本は今、国際的なプレゼンスが低下して元気がないですけど、本当は底力があって強いんだぞと、米国で働きながら何らかの形で伝えたいですね。もう一度、日本の存在感をじわじわと上げられたらいいと思います。

順子さんの今後の夢も聞いていいですか。

中川 よく聞かれるけれど、今はこの立場に集中することで精一杯。そもそも、あまり計画的ではないし……。審議委員の任期を終える頃に物価が安定していればいいとは思っています。今、物価高をお感じになりますか。

木佐 私の感覚ですが、スーパーで以前と同じ食料品を買って一・二〜三倍になっている印象があります。「だって、今日はマグロは買ってないでしょう、ステーキも買ってないでしょう、豚肉の薄切りしか買ってない……。のに?！」と。そう思うのは、食料品価格がかなり上がっているということですよ。

中川 そうですよ。物価統計の数値は、たくさんの方が多くのモノの値段を緻密な計り方をしてくれた結果で、あれはあれで正しいものです。けれども、生活している人たちは毎月同じものを買うわけじゃないし、収入や年齢によって買うものもさまざまだったりする。日本銀行は、対話でよく使う統計上の数値と皆さんの生活実感とのずれ

もきちんと分かっておかないとダメだなと考えています。だから、なにより皆さんの声を聴くことが大事です。

木佐 「お金って何？」と考えると、命みたいなもの。人を笑顔にするのもお金だし、そういう意味では生活の中で生きていますよね。生きているから、ときには非情というか怖いものにも変わる。日本では昔からお金の話はしないのがマナーみたいでしたけど、米国ではオープンだったし、今は日本でもやっぱり、話をしないといけませんよね。

中川 お金に関する考え方や知識といえば、昨年四月に政府や日銀などで「ジェイFLICC」(金融経済教育推進機構)という組織ができて、金融経済教育の出張講義を全国各地で開いています。私自身は直接携わっていませんが、認知度をもっと上げていきたいと思っていますので、発信面などで木佐さんのお知恵などご助力をいただければ嬉しいことです。本日は貴重な機会をどうもありがとうございます。